を進め得ないのは、彼此事情の爲とはいへ、慙愧の念に堪へない。併しながら今日までに知り得た所が假令之についての斷片的の知識に過ぎないにしても、從來誰も敢て公にしなかつた此の書の性質を解說して、學界の叱正を請ひ、之に對する一般の興味を喚起する一助とすることは、必ずしも無意味の事ではないと信ずると共に、自分一個に取りては、自分をして兎も角もこの方面の學問に從事するやうに導かれた恩師の還曆祝賀の記念として、感謝に滿ちた情念を以て、此の一篇を草するのは、衷心欣快に堪へない次第である。

二　本書の體裁

此の書はスタイン氏が既に記したやうに、[5] 敦煌の同一場所から出た他の回鶻語の卷子、または綴本等に於て認める厚手の黃紙とは異つて、薄い然も强い質の紙に書かれ、自分の記憶にして過無ければ、雁皮紙の薄手の種類に類するものであつたと思ふ。文字は初めから二つ折にした紙の外面の表裏にのみ記して、內面には書かず、日本や支那の書物の體裁[6]と同樣に、折目でない方の一端を綴ぢたものである。紙面の大さは Serindia の圖版に示された尺度の比例に依つて明かであるが、自分の手控に認めた所では、Ch. XIX, 002 の欄內が竪五寸六分、橫四寸四分である。001 の方については、今手記が見當らないが、大同小異であつたと記憶する。こゝに揭げた寫眞で認め得るやうに、文字は竪に書かれ、狹く殘された上方の欄外に、漢字で丁附けがあつて、第一册卽ち Ch. XIX, 001 の本文は、二（實は一、—最初の一枚に二と附け、次の一枚にも二と記してあつて、初めの二は一と見るべきである）より〔一百〕四十九に及び、外に識語を記した二枚の前綴がある。Ch. XIX, 002 は二十五より一百五に及び、二